

Concept of Purity and Pollution among Medieval *bhakti* Poets

Chihiro KOISO[†]

Abstract

Throughout the Hindu tradition, the concept of purity and pollution has been a key notion in controlling people's life and conduct. This notion is important not only for ritual practices but for day-to-day life. In this paper, I would like to deal with purity and pollution in *Maṇu Smṛti* (Code of Manu), first by clarifying and providing an overview of this notion. L.Dumont holds that the notion of purity and pollution are interlinked with the caste system and untouchability. His point of view is that hierarchy of caste is decided according to the degree of purity and pollution. *Sants* (saint-poets) in Medieval Maharashtra upheld the position that in front of God *Viṭṭhala* all are equal and there is no such hierarchy, which seems to be an egalitarian approach. Here I verify the notion of purity and pollution among medieval *sants* to contextualize the words indicating pollution, such as *vitāl*, *apavitra*, *uṣṭā*, and *ovlā* from their religious poems named *Abhangs*. Then it becomes apparent that *sants* are more conscious about pollution related to their caste. Their egalitarian approaches are limited but it forms a solid foundation for the 19th century's social reform movements in Maharashtra.

Keywords

Hinduism, purity-pollution, *bhakti*, *Vārkarī*, *sant*, *vitāl*

中世バクティ詩人にみる浄・不浄観

小磯 千尋[†]

キーワード

ヒンドゥー教, 浄・不浄, バクティ, ヴァールカリー派, サント, ヴィタール

[†] shunya@seiryu-u.ac.jp (Kanazawa Seiryu University, Liberal Arts and Sciences)

1. はじめに

インドの約8割の人々が信仰するヒンドゥー教は、宗教というよりも「Way of Life = 生き方」すべてを含む体系といわれている。つまり社会、経済、政治、文化、生活全般にわたる教えを含んでいる。ヒンドゥー教を特徴づける観念として、あらゆる物象が清浄さと汚れ⁽¹⁾という属性をもつとする浄・不浄の観念がある。浄・不浄の観念は他の宗教においても存在するが、特にヒンドゥー教において顕著な発達をみた。このヒンドゥー教の浄・不浄観を明確に定義することは難しい。ヒンドゥー社会では、衣・食・住、人間関係にいたるまで、浄性・不浄性の度合いに応じてランクづけされている。そのさいたるものが、カースト制度⁽²⁾である。不浄性というものは伝染すると信じられ、不浄性を取り除くためには、種々の浄化法が知られている。カースト制とは、理念的には、浄性のランクづけであるといっても過言ではない。

ヒンドゥー社会に見られる浄・不浄の観念においては、原則的に物理的ないし衛生面での汚れ(不潔さ)が問題にされるのではなく、あくまで儀礼的なケガレ(ritual pollution)が焦点となっている。要するに、神、信者、信仰、儀礼、生命、共同体、身分秩序などに対し、危険かつ脅威をあたえる潜在的可能性をもったものが、はじめから「ケガレたもの」として捉えられ、排除されたり浄化の対象とされるのである。こうした儀礼的なケガレの観念は、宗教的なレベルにおいてのみ見られるわけではなく、日常生活の領域にまで広く行き渡っている(橋本・宮本・山下2005:218)。

浄・不浄の観念において、重要なのは、何をすれば不浄とされるのかということである。宮本は不浄を大きく分けて「社会規範や共同体のルールに反する行為の結果もたらされるもの」と「血や死のように、当事者の意図とは関係なく生じるもの」に分けている(宮本:69)。ま

たなぜ汚れが存在するのかについてはさまざまな解釈がなされてきたが、ダグラスによる「秩序化できない異常なものは秩序を破壊する危険なものであるので、汚れとして分けねばならなかった」が代表的な解釈ととらえている(宮本:69)。

ヒンドゥー教的汚れの概念は単に儀礼的なことに限定されず、すべてを規定する目安となっている。食事や衣服、住居、人間関係などさまざまな生活の側面に関わっているのである。

この稿では、古代インドの法典『マヌ法典』⁽³⁾における浄・不浄の概念を概観し、13世紀後半からインド西部マハーラーシュトラ⁽⁴⁾で盛んとなったバクティ⁽⁵⁾を奉じるヴァールカリー派⁽⁶⁾のサント⁽⁷⁾たちの残したアバング⁽⁸⁾から、彼らの浄・不浄観を抽出しようと試みるものである。ヴァールカリー派のサントたちは出自もさまざままで、いわゆる「不可触民」⁽⁹⁾出身のサントもあり、社会的に不条理な差別に抗議の声をあげている。ここでは、背教のバラモン⁽¹⁰⁾の子として、社会的に虐げられたジュニャーネーシュヴァルとマハール⁽¹¹⁾という不可触出身のトゥーカーラー、クンビー⁽¹²⁾(農耕)カースト出身のトゥーカーラー3人のアバングを取り上げる。

2. 浄・不浄

2.1 『マヌ法典』における浄・不浄

『マヌ法典』(紀元前200～後200年頃)には、バラモンの特権的身分が明記されているが、同時に人々の生活規範にも詳細に言及している。浄・不浄についての明確な言及も多い。

渡瀬は『マヌ法典』における浄・不浄について以下のようにまとめている。

清浄は、ヴァールナ体制の最も正統な部分を形成し、祭式、ヴェーダ学習をはじめとするダルマを実践する資格と能力をあたえられ、かつ死後の果報、天界、ブラフマンの世界を得るための不可欠の要件である。逆に不浄は、この世における人々の非難とダルマからの排除をもたら

し、あの世の果報を失わせる。それゆえに不幸にして汚れに汚染されたならば、速やかに清めを実行し、心身の清浄を回復することが不可欠であった(渡瀬:152)。

つまり、浄・不浄は現世だけでなく来世にまで影響を及ぼすため、十二分にその汚れを受けないように注意しなければならないと考えられ、怖れられていたのである。

『マヌ法典』には、死は最も強い汚れとされ、「死による不浄は、サピンダ⁽¹³⁾親の間にては10日間」(MS:5-59)とある。筆者が調査したバラモンの寡婦の葬儀⁽¹³⁾とそれに続く葬送儀礼は10日間行われた。その間、家では食事の支度はなされず、近隣の親戚などが用意した食事を差し入れていた。火葬のあと、遺灰は儀礼など一切ないまま、近隣の川に流された。7日目から3日間、葬儀を専門とするバラモン僧のもとで、毎日ピンダを供える1時間ほどの儀礼が行われた。儀礼に入る前に、喪主にあたる男性は、頭頂の髪の一房を残して、床屋に髪を剃られる。これは髪に付着した死の汚れを除くために重要な儀礼であるという。10日目には10名のバラモンを家に招いてウダカ・シャンティと呼ばれる聖水による浄めの儀礼が行われ、それによって汚れが解け日常生活に復帰できるといわれている。

血は死に次ぐ汚れとされ、避けられる。誕生はめでたいことではあるが、血と結びつくために不浄とされる。誕生においては両親がその汚れを有し、父親は沐浴によって清浄となるとある(MS:5-62)。また、生理中の女性も汚れた存在とされ、他者と身体接触をして汚れを伝染させないために隔離された。

人の体に関係した不浄としては、「臍より上に存する孔はすべて浄くして、臍より下に存するものは不浄なり。肉体より排泄されたるもまた同様なり」(MS:5-132) 身体から出る12のマーラ(māla)は本来的に不浄とされている。「脂肪、精液、血液、頭垢(ふけ)、大小便、鼻

汁、耳垢、痰、涙、目脂(めやに)及び汗は、人(体)の12の不浄物なり」(MS:5-135)

誤って規定に背き浄性を侵した場合は、本来の浄性を取り戻すために、浄化法を行わなければならない。『マヌ法典』には「浄められるべきものは、土、及び水によりて浄められる。」(MS:5-108)「肢体は水により、意は真実により、個人我は、聖知及び苦行により、理解力は真の知識によりて浄められる」(MS:5-109)とある。つまり、一時的汚れは、沐浴、食事制限、または断食などで浄化される。

汚れや罪は不浄な付着物と同一視されて、清めの行為により浄化されて再びダルマの世界への復帰が許された。ダルマの世界に俗さなければ、ヴェーダの学習や祭式儀礼を行うことができず、あらゆる社会的資格の停止を意味した。同時に、清浄の確保と維持は死後の世界にも好ましい結果をもたらすと信じられていた(中村:287)。

不浄というものが、容易に伝播・伝染しうると観念されており、伝播ないし伝染することによって災いや不幸が発生するから、危険視される(宮本:69)。

『マヌ法典』では、不浄と汚れ、そして罪は実体として意識され、それが付着し、他者へも伝染されると信じられていたことが分かる。

2.2 不浄, 汚れ, 罪

ここで、今一度、不浄、汚れ、罪の関係について整理しておこう。

古代インドの浄・不浄観において最も特徴的なことは罪が汚れと同一視されたことである…もうひとつの大きな特徴は、汚れ、罪が実体視されていたことである。汚れは発生しそして移動する実体に他ならない。罪が生じる、罪の一部を負う、罪と結ばれる、汚物に触れるとけがされる、あるいは死の汚れに親族は汚されるといふ考えは、すべて汚れ・罪を実体視することに発する。そして清めは、汚れ・罪という実体の除去に他ならない(渡瀬:153)。

このように古代においては汚れと罪を分けて捉えていなかった。それが少しずつ変化してきたのが、中世社会である。小谷は古代からインド中世社会へと展開していく歴史過程において、罪の観念が肥大化していったことについてさまざまな事例を提示しながら論じている。罪の観念と汚れの観念の関係において以下のように述べている。

インド中世においては、罪と違って、穢れは「伝染」するものとはみなされていなかった…インド中世においては、穢れは穢れの源に直接触れた者だけにかかわることであって、その者からさらに他者に広がっていくとは考えられなかった…だから穢れは沐浴などによって個人的に浄めることができるものであった、他人には迷惑をおよぼさないものだったのである（小谷2005:203）。

古代インドでは同一視されていた罪と汚れが中世になってから分化し、不浄は直接かかわった者の浄化ですんだが、罪は他者にも伝染するために、プラヤシチッタ⁽¹⁵⁾（贖罪）と呼ばれる浄化法が盛んにおこなわれるようになった。サントたちのアバングからは汚れと罪の差異を明確にすることはできなかった。この辺の変化については、この稿では紹介するにとどめておく。

3.

3.1 ヴァールカリー教団

ヒンドゥー教における最終目的は輪廻の桎梏から逃れて解脱することである。解脱に至る手段として3つの道が知られている。第一の知識（ジュニャーナ）の道は瞑想などを通じて解脱を目指す難解な道とされる。第二の道は行為（カルマ）の道で、これは行為の結果に執着することなく、ひたすら宗教義務を遂行する道とされる。これも知識の道同様、難解で誰もが進める道ではない。第三の道、信愛（バクティ）の道は心から神に帰依し、その神の恩寵を受け

ることで救済されるとする道であり、信仰心さえあれば誰もが精進できる道である。このバクティ思想は7、8世紀ころ南インドで起こり、13世紀にはマハーラーシュトラにも波及し、多くのサントと呼ばれる宗教詩人によって地方語でアバングという宗教讃歌が作られた。マハーラーシュトラでバクティ思想の推進の担い手となったのがヴァールカリー派で、現在に至るまで多くの信徒を集めている。「ヴァールカリー」という言葉がこの教団の性格を的確に表している。「ヴァールカリー」の語は「ヴァーリー」と「カリー」という二つの単語から成り立っている。「ヴァーリー」の語源「ヴァール」は1回、2回の回数を表し、「カリー」はそれを行う人の意味である。つまりヴァールカリーとは、「何度も繰り返し行き来する人」の意味で、聖地パンドルプール⁽¹⁶⁾へ定期的に巡礼することを指している。ヴァールカリーは別名、「マールカリー（数珠を身につけた者）」ともいわれ、この派の人々が菜食の誓いを立てた証しとして、トゥルスイー（めぼうき）の木で作られた数珠を身につけることからきているといわれている。

デレウリーの定義に従えば、ヴァールカリーとは、「家族とともに暮らし、世俗の職業を遂行しながら、クリシュナ神の化身としてのヴィツタル神へのバクティを通して解脱を求めるために、毎年決まった時期にパンドルプールへ巡礼し、厳格な菜食主義を守る者である」（Deleury 1960: 3）。ヴァールカリー教団に入るためには、難しい入門儀礼や規制ではなく、「菜食の誓いを立てること」、「毎年の巡礼参加」が十分条件となっている。ヴァールカリーの人々の間では、「巡礼にその姿がみとめられないということは、その人は死んでしまったか、死の床にいるに違いない」とまで言われている。また、この派は、階級の序列や儀式をもたず、パンドルプールへの巡礼を通して信徒間の結束を強めている。信徒たちは自発的に巡

礼に参加し、過去にヴァールカリー教団が輩出したサントが残した宗教書やアバングを読んだり、歌ったりすることによって修養を積んでいる。

3.2 サントたちのアバングに見られる浄・不浄を表す語

サントたちの膨大な数のアバングから浄・不浄に関連した単語を拾いだし、その単語がどのような文脈で使われているかを検証するために、以下の語句を選定した。

viṭāl サントたちのアバングにもっとも頻繁に「汚れ」、「不浄」を表す語として用いられる。生理の汚れを指す語として、現代マラーティー語でも使われている。そのほか、不浄を表す語は **apavitr**, これは清浄を表す **pavitr** に否定辞の **a** をつけて清浄でない=不浄 を意味する語である。また、**dūsti** は、汚れた、汚染されたを意味するが、人の性格などを表す「悪意のある」、「邪悪な」「不正な」の意味にも使われる。**uṣṭā** 口をつけて（唾液がついて）汚れた食物を指す。

mal 汚物、排泄物、身体的排出物、罪などを表す。

śuddha 清浄、純粹を表す。

sovḷā ソーヴラー サンスクリット語のスマンガラ (su-mangala きわめて吉祥の意) という語から派生したもので、儀礼的に清浄な状態をいう。つまり儀礼を行ったり、食事をするのできる状態をいう。現代ではソーヴラーは男性の場合は絹の腰布、女性の場合は絹の9ヤードのサーリーを指す。つまりソーヴラーの状態のときに身に着ける衣装のことも指すようになった。反対の意味の **ovḷā** オーヴラーはサンスクリット語のアマンガラ (amangala) 不吉なから派生した語であり、儀礼などに適さない汚れた状態をいう。特に親族に死者が出たような状態や生理期間などを指す。

次の章では上記の単語を含む、3人のサントたちのアバングを検証する。

4. ヴァールカリー・サント

4.1 ジュニャーネーシュヴァル (1275-1296)

背教のバラモンの子としてカースト外の扱いを受けた。両親はプラーヤシチッタ（罪の清め）のために入水し、残されたジュニャーネーシュワルら4人の子供たちはバラモンたちから迫害を受けながらも生まれながらの宗教性を発揮させていく。ジュニャーネーシュヴァルは水牛にヴェーダを唱えさせるなど、多数の奇蹟を行ったことでも知られている。

ジュニャーネーシュヴァルが活躍した13世紀後半にはヴァールカリー派はすでに教団としての形を整えていたと推察される。ジュニャーネーシュヴァルが著した『バガヴァッド・ギター』の注釈書『ジュニャーネーシュヴァリー』は現在に至るまで、マハーラーシュトラのバクティの中心的テキストとされている。その他、哲学書『アムリターヌバヴ』、ヴィットル神を讃える多くのアバングも残している。パンダルプールへの巡礼を開始したのもジュニャーネーシュヴァルで、彼はヴァールカリー教団に確固とした思想的礎を与えたといわれている。ヴァールカリー派はジュニャーネーシュヴァルに続いて、さまざまな社会層から多くのサントを輩出していった。ジュニャーネーシュヴァルが活躍した13世紀後半は、ヴァールカリー教団の第一の隆盛期といえよう。

ジュニャーネーシュヴァルのバクティの定義は以下の一文に見て取れる。

生きとし生けるものそれぞれに神が宿ることを感得すること /

それが私の説くバクティ・ヨーグである // (J. 10-118)

万物に神を見出し、その神に帰依することが彼のバクティの神髄である。そこには普遍的平等意識が見て取れる。

自らに課せられた義務 (svakarma) を遂行す

ることは、日々の供犠であることを知れ/
もし自らの義務を滞りなくこなせば、罪が入り
込むすきはない// (J.3-81)

ジュニャーネーシュヴァルは背教のバラモン
の子としてバラモン社会から迫害を受けたが、
ジャーティ・ヴァルナを社会の基本として受け
入れ、それぞれのヴァルナに割り当てられた社
会的義務を遂行することの重要性を説いてお
り、社会維持に有益な行為を捨てよとは説いて
いない。

高貴な家に生まれずとも、たとえアウトカース
ト (*antyaja*) として生まれようと (いかなる
家系に生まれようと) /
あるいは獣の姿をとっていようと受け入れら
れる (バクティさえあれば…) (J.9-441)

信仰心さえあれば、社会的不平等をも凌駕で
きると説くも、その社会的不平等を打破すべき
であるということまでは主張はしていない。

ゆえに家系、ジャーティ、ヴァルナはすべて意
味はなし/ただ私との合一 (塩が海水に溶ける
ように) のみが究極の目的と知れ// (J.9-446)

もしわが身を汝のしもべと称したなら汝を汚す
(*viṭāl*) ことになるのか? (J.18-21)

その者の徳や罪は知性に影響しない/
水がガンガーに混ざると不浄さ (*viṭāl*) が消え
るように// (J.18-450)

我らが視界は浄められ (汚れが消え)、汝はそ
の姿を顕現させた// (J.11-292)

この境地に至るために信仰のみに依るべきでは
ない/
なぜなら、もしバラモンが不可触民 (*antyaja*)
と接触したら、バラモンも不可触となってい
ないだろうか? // (J.17-51)

不浄な (*apavitr*) 食べ物が唇に触れた途端 /
人は罪の容器となる/ (J.17-165)

ジュニャーネーシュヴァルは宗教的には普遍的
平等主義を唱えているにもかかわらず、ジャー
ティ・ヴァルナ制に対して積極的に反対してお
らず、社会の基本的構造として受け入れている。
また、汚れに対しても伝統的ヒンドゥー的
価値観を踏襲していることが分かる。

4.2 ツォーカーメーラー (?-1338)

マハーラーシュトラの「不可触民」を代表す
るマハールとして生を受ける。信仰心の深さ
からヴィツタル神のお気に入りであった (島
1994: 235)。神との親密さをうかがわせるエ
ピソードがマヒーパティの聖者伝に多数残され
ている。神の前では出自の別なく平等である
という、ヴァールカリー教団の平等主義的博愛主
義を体現しているとされるツォーカーメーラー
ではあるが、社会的に汚れた存在、不浄な存在
として扱われることに抗議するアバングを多数
残している。彼のアバングでは、自らの出自を
汚れた・不浄な (*viṭāl*) と繰り返している。

私は卑しい出 (*jātihīn*) だ/
どうして汝に仕えることができよう/
人々は私に「出て行け、出ていけ」という/
[出て行ったら] どうして汝に会えよう/
人々は私に触れると水で身を浄める/
我がゴーヴィンダ、ゴーパーラ、
ツォーカーにお慈悲を// (C.76)

清浄 (*suddha*) なツォーカーメーラーは神の名
をいつも唱える//
私はアウトカーストのマハール/
ニーラーが私の前世//
彼はクリシュナ神を非難した/
その報いで私はマハールとして再生した//
ツォーカーは申す、この不浄 (*viṭāl*) は前世の
報い// (C.73)

マハールとして生まれたことを前世で神を非難したことの報いとして受け止めている。それは神の意志によるものだから仕方がないと諦念に包まれている。

ヴェーダも法典類も汚れ (*viṭāl*) /
プラーナ (古潭) は不吉 (*amangala*) で不浄 (*viṭāl*) //
心も精神も汚れ (*viṭāl*) 存在そのものが汚れ (*viṭāl*) /
体は不吉 *amangala*) で不浄 (*viṭāl*) //
ブラフマー神も汚れ (*viṭāl*) ヴィシュヌ神も汚れ (*viṭāl*) /
シャンカラ (シヴァ) 神は不吉 (*amangala*) で不浄 (*viṭāl*) //
生まれが汚れ (*viṭāl*), 死ぬ時も汚れ (*viṭāl*) /
ツォーカーは申す, 我が人生汚れ (*viṭāl*) だらけ/
始めから終わりまで汚れ (*viṭāl*) だらけ/
誰が我が身に汚れ (*viṭāl*) をつけたか知らぬ// (C.282)

ツォーカーメラーは、自らの不可触民としての出自を、汚れとして扱われることに疑問を投げかけている。汚れが「身につけられたもの」という表現が汚れの概念の本質を表している。

私はマハールの中のマハール/
たいそう空腹で、汝の食べ残し (*uṣṭā*) にあずかるために参上した// (C.343)

現代マラーティー語でも人が口をつけた (他者の唾液のついた) 食べ物は *uṣṭā* とよび、汚れたものとしている。神の食べ残し=お下がり は普通「プラサード」として大切にされるが、ここではあえて汚れたものと表現していることに違和感を覚えるが、マハールの人たちは、人の食べ残した食べ物を食べるように強いられてきた歴史事実をこのような形でアバングに読み込

んだのではないかと思われる。

五元素は全て不浄 (*viṭāl*) で、世界中に満ちている /
ならば、何が浄 (*pavitr*) で何が不浄 (*apavitr*) か /
体そのものが不浄 (*viṭāl*) /
始めから終わりまで不浄 (*viṭāl*) /
誰が清浄 (*pavitr*) になれるやら /
ツォーカーは申す /
「誰が不浄 (*viṭāl*) を超えられるのか、疑問に思う」と // (C.279)

何がソーヴラー (*sovlā*) で何がオーヴラー (*ovlā*) なのか /
我がヴィツタル神はどちらも超越している //
真の汚れ (*viṭāl*) とはそもそも何か /
元はすべてソーヴラー (*sovlā*) なはず //
五感がこの身を汚すのか /
この世の中で誰が完全なソーヴラー (*sovlā*) を保てようか?
ツォーカーは申す, 我がヴィツタル神のみがソーヴラー (*sovlā*) /
レンガの上に立つ神のみが...// (C-281)

島による解釈は、ツォーカーメラーは、外見的には不浄な不可触民で世間に受け入れられることはなくても、内面的には真に神を信じ神を愛する帰依者であり神聖な存在であるとしている (島1994:239)。自分が置かれた不可触民、マハールという出自を意識し、彼は輪廻・業思想を認めることで理解し、ある諦念をもってそれを受け入れていたといえよう。

4.3 トッカーラーム (1598-1649)

クンビー (農耕) ジャーティの出。トッカーラームはヴィツタル神への思いとバクティの真髓を情感込めて歌った5000以上のアバングを創作し、それらは『トッカーラーム・ガター』としてまとめられている。アバングに詠みこま

れた思いは、真っ直ぐに一般大衆の心に届き、今もなおマハーラーシュトラの人々の精神的、情緒的な拠り所となっている。カースト制度や社会的不平等の理不尽さを批判したストレートなアバングも数多く残している。また、神の名を唱え、讃歌を唱和するサンキールタン⁽¹⁷⁾で大衆の心を魅了した。現在もそれらのアバングは大衆に歌い継がれている。

トゥッカーラムのカースト制度を批判したアバングには、以下のようなものがある。

神を感得するのにカーストの別はない… /
神への奉仕に専心するものが聖なる者…
(TG.3241)

神の称名を好まぬバラモンはバラモンでなし/
トゥッカーは申す、そのバラモンは母の胎内に
いたときに、母親がマハールと不義をしたに
違いない…/(TG.706)

不可触民 (*antyaja*) でも神の称名を好むも
のは、バラモンと同じ (TG.707)

マハールに接触して怒る者はバラモンとはいえぬ/
神よ、清浄 (*shuddha*) な行いをしてても /

不平等の汚れ (*viṭāl*) が身についた/
オーヴレー (*ov|e*) を捨て/ソーフレー (*sov|ā*)
を手に入れる… (TG.2926)

あえてというなら死の咎のみ/
このようにチャンダール⁽¹⁸⁾を不可触民という
者は/
その者自身の心に不可触性が満ちている /
トゥッカーは申す/
心にある感情によってジャーティが決まる /
(TG.30)

マハールやチャンダールを不可触民と思うも
のは、自らが不可触民である/
ジャーティは生まれでなく、志し、日々の生
き方、神へのバクティによって決まると/
真に清浄 (*pavitr*) なる人とは?生理中の女
性に触れず離れている人 / (TG.588)

社会的差別に対して、痛烈な批判を浴びせて
いる。他者を差別する者は自らが不可触民であ
り、人の生きざまは神への帰依心によって決ま
るといふ。ただ、清浄な人の定義として「生理
中の女性に触れずに離れている人」というよう
に、生理の汚れを重要な汚れとして受け止めて
いることが窺える。

エカーダーシー⁽¹⁹⁾の断食のおりにキンマの葉
やパーン⁽²⁰⁾を食べるのは/
生理中の女性の汚れ (*viṭāl*) に触れるようなも
の / (TG.170)

我が耳に不吉な響きを入れるなかれ/
…ハリ・カターを貶めるような、バジャンや
キールタンをけなすような/
たとえ出自が高貴であろうとも/
ハリ・カターを聞かぬ者は罪人で、チャンダ
ールと同等と理解すべし / (TG.203)

罪人とチャンダールを同等と理解するべきだ
という表現から、不可触民に対する忌避、差別
意識もみてとれる。

バジャンやキールタンを金儲けの手段とする
サードゥーは/
汚れ (*viṭāl*)、墮落した心の持ち主だ…//
(TG.169)

神への帰依心で満たされた者が /
清浄 (*pavitr*) なる者 // (TG.43)

神への帰依心で満たされた者が /
清浄 (*pavitr*) なる者 // (TG.43)

ロバがミルクを出したとしても、牝牛と呼べる
だろうか?/
牝牛の首に花輪をかけたなら、白鳥と呼べるだ
ろうか?サルが沐浴してティッカ (額の印) をつ

く、白鳥と呼べるだ
ろうか?サルが沐浴してティッカ (額の印) をつ

けたら、バラモンになれるというのか?/
トゥカーは申す、バラモンは高い地位から落ち
たとしても尊敬されるべきである/(TG.2223)

この世にある間はカーストの差異を受け入れ
るべきだ。差異は三昧の境地に入れば消える
(TG.920)

トゥカーラームのアバングには、カースト批
判を正面から行うものがあるかと思うと、バラ
モンを尊重するアバングもあり当惑させられ
る。鳥がいうところの「ときおりかいまみせる
反バラモンの・反カースト差別的な社会意識」
(鳥 1994:234)であり、一貫して反バラモン
的、反カースト的社会意識を貫くまでには至っ
ていない。トゥカーラームのアバングをまとめ
ると、ひたすら神を思い、神に帰依すること
で、日常生活における差別は宗教的に昇華され
ると説いているといえるだろうか。

5. まとめ

ヴァールカリー派のサントたちは出身階層
も、カーストもさまざまであることが特徴とし
て語られている。この稿で紹介した3人のサ
ントも異なる社会階層に属し、宗教的バックグ
ラウンドもそれぞれ異なる。彼らのアバングか
ら窺える浄・不浄観は階層的序列社会におけ
る、身分的浄・不浄観に言及したものが大半を
しめている。カースト的序列社会とそれにまつ
わる差別に対して憤りの声をあげる側面もある

が、最終的には諦念をもってそれを受け入れて
しまっている。

マハーラーシュトラの近代化の過程で、ラ
ナーデーらはヴァールカリーのサントたちに生
まれや階級差別に対する抵抗意識を見出し評価
した(Ranade,M.G.1966)。しかしそれはあく
まで、カースト枠内に限定されたものであっ
た。しかし、サントたちの功績は、社会の虐げ
られた人々の宗教生活を精神的なものに高めた
ことがあげられる。アバングや宗教書、巡礼な
どの実践を通して、大衆に社会生活上での徳や
現世の行為の重要性を説き、大衆の自覚を促し
自信をもたせたことは、当時の厳しい階級序列
社会においては画期的なことであった。この基
礎があったからこそ、19世紀以降の社会改革
運動がマハーラーシュトラでは勢いよく進めら
れたのである。

ツォーカーが繰り返し歌う「不条理な己の卑
しさ、不浄さ」は、マハール側からのカースト
差別に対する糾弾の声に他ならない。しかしそ
れは、カーストヒンドゥーが主導するヴァール
カリーの伝統の中で「最高神を前にした個人の
卑小さ」へと意味を変えてきた。サントたちが
示す「神のもとでの平等性」は、現実のマハール
たちの有り様とは乖離したものであった。

サントたちの浄・不浄観と『マヌ法典』にお
けるその差異は本稿では明確にできなかった。
小谷のいう「罪概念の肥大化」をヒントに
汚れの分析を進められたらと思う。

注

- (1) 関根は儀礼的な劣等性を意味する否定的観念としての「不浄」と肯定的、創造的な潜勢力を有する両義的観念としての「ケガレ」とのあいだには明確な区別がなされなければならないと主張する(関根 1995: 1)。本稿では「ケガレ」論には立ち入らず、不浄をもたらす源としての「汚れ」のみに言及した。引用文によっては「穢れ」、「ケガレ」が用いられている場合もあるが、この稿ではその定義にまで論を進めていない。

小谷は『罪と文化』において、古代からインドの中世社会へと展開していく歴史過程において、罪の観念が肥大化し、人々がいかに罪を恐れていたかを論じている(小谷 2005:200)。また小谷はデュモンの「カースト制度論」が浄・不浄イデオロギーを絶対視しており、穢れ(不浄)の観念と区別されたものとして、罪の観念を捉えようとする姿勢がないと批判している(小谷 2005:200-201)。

- L.デュモンは、浄をブラーフマナ（バラモン）が、不浄を不可触民が体现するという両極を設定することで、階層化したインド社会を理解しようとした。政治権力や経済力は、浄・不浄の極をゆるがさないとされた（藤井 2013:46）。また、関根、小谷もデュモンの説の限界を指摘している。
- (2) この稿ではインドの身分社会体制を便宜的に「カースト」としたが、カーストはポルトガル語の「カスタ」（家柄、血統）に由来する。インドではカースト集団を「生まれを同じくする者の集団」を意味するジャーティ *jāti* という語でよぶ。日本人がカーストとよんできたものは、インドでは「色」を表すヴァルナ（種姓）とよんでいる。つまり、カースト=ヴァルナ・ジャーティ制と捉えると分かりやすい。ヒンドゥー社会における個人、集団の階位的な位置づけをおこなうものである。
 - (3) 紀元前後2世紀ころの著作といわれている。インドの古典法典。おもにバラモンの日常生活の規範や倫理観を説いたが、全ヴァルナ・ジャーティの社会規範などに言及した書。
 - (4) インド西部の州。マラーターの国の意味。
 - (5) 人格神に肉親に対するような愛をこめて帰依することで、神の恩寵を受けて解脱に至ることができる。インドの地方語や文芸、芸能、絵画など独自の文化を生む原動力となった思想潮流。
 - (6) マハーラーシュトラにおいてバクティを推進した教団。
 - (7) ヴァールカリー派の聖者の尊称。サントは宗教詩を残したことから、*saint-poet* 宗教詩人とも訳される。
 - (8) 語義は「切れ目のない、連続した」の意。マハーラーシュトラのサントたちが残したバジャンの一形式で、ヴィツタル神への讃歌のことを指す。
 - (9) カースト社会で、4 ヴァルナ（種姓）外に置かれた最下層民。上位カーストに汚れを与えるとされ「触れてはならない」（*acūt*）と呼ばれてきた。今日では「不可触民」は差別用語として用いず、公式には「指定カースト」と呼ばれる。また、現在彼らの自称としてダリト（*darit*=踏みしだかれた、抑圧された）の語が定着しつつある。インドの社会秩序においてどのような地位を占めるかの基準は、人格や専門性などではなく、その職業をおこなうにあたっての接触する物体の浄・不浄の度合いによって決められているとされる。汚物清掃人（バンギー）、洗濯人（ドービー）、皮なめし職人（チャマル）、死畜処理や雑役（マハール）などは、不浄なものに触れやすいとして、「不可触民」として、特に低い地位におかれてきた。
 - (10) 背教のバラモン：当時人生の4つの時期（チャール・アーシュラム）学生期、家住期、林住期、遊行期の順番を乱すことは重大な罪であった。ジュニャーネーシュヴァルの父は、遊行者となったのちに家住期に戻って子をなしたため、背教者として社会から村八分の扱いを受けた。
 - (11) カースト社会で、4 ヴァルナ（種姓）外に置かれたいわゆる「不可触民」のひとつで、村落で見張りや使い走り、死畜の処理などの雑役に従事する。現代マハーラーシュトラ州を中心に分布する大カースト。マハーラーシュトラの人口の9%を占める（1981年国勢調査）。
 - (12) 4 ヴァルナの4番め、シュードラのひとつである農耕に従事するジャーティ。
 - (13) 祖霊に対する供物としてピンダ（団子）を供える資格を有する親族のこと。
 - (14) 筆者が1997年、マハーラーシュトラ州、プネーにおいて立ちあうことができた葬儀。
 - (15) 贖罪、罪の浄めのための儀礼。
 - (16) マハーラーシュトラ州の南東部に位置する聖地。ヴァールカリー派の巡礼の目的地であり、ヴィツタル神の寺院がある。
 - (17) 神の名を唱え、讃歌を唱和する集団歌謡スタイル。マハーラーシュトラでは間に説教をはさむこともある。
 - (18) シュードラの父とバラモンの母との間に生まれた者が属するとされるカースト。蔑視され差別の対象となっていた。
 - (19) ヒンドゥー太陽太陰暦の白半月の11日め。ヒンドゥー教では11日は聖なる日で、この日は断食をして神に思いをはせる日とされる。
 - (20) 嗜好品的一种。キンマの葉に消石灰を塗って香料を入れたもの。タバコを混ぜる場合もあり酩酊効果もある。キンマの葉自体は聖なるものとして儀礼などにも用いられるが、ここでは嗜好品としての側面が強調されている。

略号

MS : 田辺繁子訳『マヌ法典』

J : *Sārth Śrī Jñāneśvarī*

C : *Śrī Sant Cokhāmēlā*

TG : *Sārth Śrīukārāmācī gāthā*

引用文献

一次資料

Śrīsakalsantghāthā, collected by Sakhre Maharaj, ed. K. A. Joshi, Srisantwangmaya Prakashan Mandir, 1967.

Śrī Sant Cokhāmelā: Caritra aṇi abhang, ed. by S.B.Kadam, Śabdālay Prakāśan, 1998 (rep.) .

Sārth Śrītukārāmācī gāthā, ed. by Vishnubuva Jog Maharaj,

Shri Samrtha Sadan, 2003 (rep.)

Sārth Śrī Jñāneśvarī, narrated by Sakhre Maharaj, ed. by D.Deshpande, Sarthi Prakashan, 1992 (rep.)

二次資料

藤井毅 『インド社会とカースト』世界史リブレット (山川出版社, 2013年)

橋本泰元, 宮本久義, 山下博司 『ヒンドゥー教の事典』 (東京堂出版, 2005年)

小谷汪之 『不可触民とカースト制度の歴史』 (明石書店, 1996年)

小谷汪之 『罪の文化』 (東京大学出版, 2005年)

宮本要太郎 「ケガレの意味に関する比較宗教学的考察」『関西大学文学論集』第58巻第1号
メアリー・ダグラス (塚本利明訳) 『汚穢と禁忌』 (思潮社, 1972年)

関根康正 『ケガレの人類学』 (東京大学出版会,

1995年)

島岩 「デカン・バクティと不可触民：不可触民の聖者ツォーカーメラー」『叢書カースト制度と被差別民 第1巻 歴史・思想・構造』 (明石書店, 1994年)

田辺繁子訳 『マヌ法典』 (岩波書店, 1990年)

森本達雄 『ヒンドゥー教--インドの聖と俗』 (中公新書, 2003年)

渡瀬信之 『マヌ法典』 (中央公論社, 1990年)

Abott, J., *Stories of Indian Saints*, Part I & II, Motilal Banarsidass Publishers, 1933.

Abott, J., *Life of Tukarama*, Motilal Banarsidass Publishers, 1986 (rep).

Deleury, G. A., *The Cult of Vithoba*, Pune, 1960.

Mokashi-Punekar, R., "On the Treshold: The Songs of Chokhamela", *Untouchable Saints*, eds. E. Zelliott & R. Mokashi-Punekar, Mahohar, 2005.

Ranade, M. G., *Rise of the Maratha Power*, Publication Divition, 1966.

Ranade, R.D., *Mysticism in Maharashtra*, Motilal Banarsidass Publishers, 1988 (rep.)

Zelliott, E., *From Untouchable to Dalit*, Manohar, 1996.

Zelliott, E. & M. Berntsen (eds.), *The Experience of Hinduism*, SUNY Press, 1988.

